人生のフリースクール
～若き日に学んだこと～

直方市長　壬生隆明

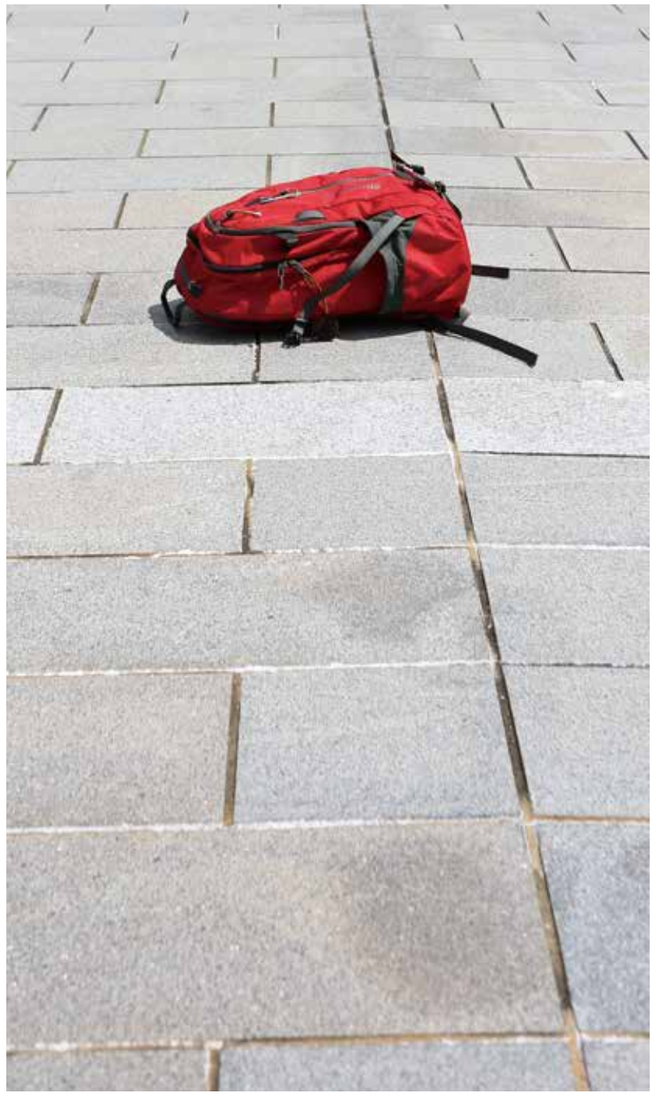
高校を卒業してからの4年間が、私にとって一番大切な時間でした。同級生が大学に進学している時期に、私は、進学することもなく、就職することもないまま、社会に浮遊していました。学校の規則や時間割に拘束されることもなく、一日一日を自分の思うままに過ごすことができることに解放感を感じていました。もちろん不安はありました。根無し草の生活に、将来への展望はありませんでした。これから自分がどうなるのか、考えることもありました。しかし、若さが、そんな不安を吹き飛ばしました。なんとかなるさ、そんな逃げ道が準備されていました。私の前には無限の時間が伸びていました。

他方、両親は、私の将来に不安を覚えていたに違いありません。しかし、逃げ道を準備していた私は、両親の心痛など顧みることはありませんでした。私は、悪いことをしているのではない、自分が疑問に思うことに素直に反応しているだけだ、いつか大学にも進学し、一人前の人間になると自身に言い聞かせていました。両親にはそんな私を信じてほしいと考えていました。全く身勝手なものでした。

この4年間に、私は放浪しました。深夜に到着した青森駅前では、リンゴ売りの露店が立ち並び、裸電球の下で真っ赤に熟れたリンゴが照らし出されていました。初夏の北海道のユースホステルで知り合った若者は、早朝、私をバイクの後ろに乗せて白樺の林を抜け、昭和新山の麓まで連れて行ってくれました。また、秋には長崎から天草を経て阿蘇に渡り、阿蘇のユースホステルで知り合った若者たちと烏帽子岳や中岳に登り、中岳の火口を半周して仙酔峡から一宮まで歩きました。どれもこれも忘れ難い青春の旅でした。

こうした放浪の旅のさなかに、私は、その後の人生を決めるできごとに出会いました。三宅島でのことでした。私は、スカイメイトという空席がある場合だけ若者を格安で搭乗させるチケットで三宅島から羽田行きの飛行機に搭乗していました。そして、もうすぐ出発だと思っていたとき、機内アナウンスが入りました。「スカイメイトでご搭乗のお客様、ご連絡がありますので後部スチュワーデスまでお越しください。」というものでした。おそらく私のことであろうと考え、スチュワーデスのところに行きました。すると、いきなり「ご予約のお客様が来られたので、今すぐ飛行機から降りてください。」と言われました。私は、空席待ちのうえ、所定の手続きを経て、手荷物を預けて搭乗していました。なぜ今さら降りなければならないのか、理解できませんでした。私は、抗議らしい態度を示しました。しかし、スチュワーデスの態度は頑なであり、とにかく降りてくださいの一点張りでした。私は、シブシブ飛行機から降りました。

タラップを降りて滑走路を歩き出したところで、私のリュックサックが滑走路に放り出されていました。誰も拾ってくれる人はいませんでした。私は、放り投げ出された自分のリュックサックを手に取り、空港カウンターに向かいました。その途中、中年の男性とすれ違いました。この男性が「予約していた客」だとわかりました。彼は、私に挨拶をすることもなく飛行機に向かって歩いて行きました。私は、空港カウンターに行き、料金の払い戻しを受けましたが、航空会社の社員からは、なんの謝罪もありませんでした。その後、私は、半日以上の時間をあてもなく過ごしたのち、空港とは島を半周した反対側にある港から船に乗り、翌朝帰り着きました。



私は、このできごとを決して忘れることはありませんでした。今から考えると、正規の手続きを経て搭乗していたのですから、飛行機から降ろされる理由は何もありませんでした。しかし、私には、この理不尽な要求に対して、闘う術も力もありませんでした。私は、無力でした。このときの虐げられた経験を決して忘れることはありません。このとき味わった屈辱と無力感が、その後の私の闘いの原動力といっても過言ではありません。私が、4年間の人生のフリースクールで学んだ最大の財産でした。

私は、これからも闘っていくでしょう。闘う術と力を少しは学んだのですから…。